

THE・思春期

岐阜市立岐阜西中学校 3 年
鷺見音杷(すみ おとは)

「ああ、消えてしまいたい。」

これは、中学 2 年生の私の人生最大の願いであり、人生最大の嘘でした。

そのころの私は、「認められたい」という欲求に強く縛られていました。認められたくていろいろ頑張っているのに、自分は満足することができませんでした。あろうことか、自分にいら立ちを覚えるばかり。塾の自習室に行き勉強をする。毎晩ランニングや筋トレをする。でも、満たされる気はしない。足りない。足りない。圧倒的に足りない。自分に足りないものばかりを探してしまう。そんな毎日でした。

学校生活では、委員会の仕事やキャンペーンの取組がうまくいくよう、学級委員にも力を貸してもらうなどして、働きかけました。しかし、何をしようにも、私は、頑張る私を認めようとはしませんでした。それどころか、認めて欲しいがために働きかけているのだと勘違いをしてしまい、自分をいやしい奴だと思ってしまっていました。自分のことをそう考えるのはつらかった。でも、そうせずにもいられなかったのです。自身を無意味に追い込んできた先は、底なしの闇でした。

1 日また 1 日と日々を終えて泣く私は、自分にあきれてしまいました。次第に、自暴自棄に陥りました。そうなっても誰も味方がいない。自分さえも。そんな考えに溺れていきました。

学校に本当に行きたくなくなったある日のこと、私は学校内に足を踏み入れた途端、泣き崩れました。過呼吸になるほど思いっきり。

担任の先生は、私のために時間を作り、話を聞いてくださいました。私の本音の数々を。「自分の持っている病気が怖い」「周囲の信頼できなくて嫌だ」「周囲の目も怖い」「ああ、もう消えてしまいたい」。

話を聞き終えた先生は、「少しでも信頼できる人に想いを伝えて、自分から支えてもらえる環境を作ってみては?」この言葉に後押しされ、私は 3 人の友人達に思いを伝えました。ふざけ合うだけの間柄だと思っていた 3 人は、苦しむ自分を見て、真剣に向き合ってくれました。

いつからか、私は少しずつ変わっていきました。「プラスに捉えていこう!」なんて口先だけで言ってばかりで、心の中にはいつもマイナス思考のままだった自分に対し、「もう、こんな自分は脱いでしまおう。私の知らない私を見つけに行こう。」そう言い聞かせました。この時、初めて自分が自分を抱きしめてくれた気がしました。とても温かった。

不安が消えたわけではありません。ありのままの自分を学級のみんな受け入れてくれるのだろうか。見せてしまえば、もう繕うことはできない。本当の鷺見音杷を「私」は見せることができるのだろうか。グルグルした頭を抱えながら、学校に行きました。

「やってしまった。」その日私は、何と忘れ物をしてしまったのです。「誰かに借りられないかな。」「ごまかせないかな。」そんな考えも頭をよぎりましたが、その日の私は違いました。自らの失態を説明し、迷惑をかけたこと。委員として自覚が足りなかったことに対し、みんなに頭を下げて謝ることができたのです。その時は、何とも今までになかったことくらい清々しい気持ちでした。

その日の放課後、私は学級のみんなが書いてくれたメッセージカード「For 温」も見っていました。「呼びかけ頑張っていてすごいね!」「自分から謝るなんて勇気がいるよ。」「1 日を見通して行動していてさすがだと思う。」どのカードからもみんなの温かい心であふれていました。私を見て、認めてくれて書いてくれたんだな、涙が溢れ出しました。

今だって不安になります。でも、そんな時は思い出すのです。あの日、皆がくれた温かい言葉の数々を。そして私は私を抱きしめる。「大丈夫だよ。」

中学生。思春期。誰もが、私と同じように辛く苦しい思いをしてきたでしょう。でも、信じることを忘れないで。誰かがきっと、あなたのことを見ていてくれるということ。